

弘前城の時計・時太鼓と城下の時鐘について

篠村 正雄

はじめに

日本における時刻法について、木下正史氏は、斉明天皇六年（六六〇）、漏刻が使用され、平城京・平安京では陰陽寮に属し、陰陽寮式諸事擊鼓条に子・午に九打、以下一打ずつ減らし、巳・亥に四打を鐘鼓で打ったとする^①。角山栄氏は、天正三年（一五七五）、北条氏政が出陣の際、時刻を太鼓・鐘の合図で行動規制し、江戸時代には時鐘を城下町松阪・小倉・高松・江戸と設置が拡大していったとする^②。平山清次氏は、わが国の時刻法は夜明けより日暮れまで、日暮れより夜明けまでを六等分する不定時法が用いられ、一刻（二時間）の長さの違いがあり、明治六年（一八七三）の改暦で廃止されたとする^③。橋本万平氏は、江戸時代に平安時代の鐘鼓で刻数を打ったことが踏襲され、各辰刻の真ん中を「半」と呼び、江戸城本丸・西丸土圭の間の懸置時計を土圭間坊主が扱い、太鼓坊主が其時毎に各部屋を廻って只今何時と触れ、太鼓櫓の太鼓を打って時刻を知らせていたとする^④。浦井祥子氏は、時鐘は本石町・寛永寺・浅草寺・本所横堀等一一か所に置かれ、本所横堀では武家・寺社・町方から

維持費を徴収したとする^⑤。一関市博物館発行の『時の太鼓と城下町―江戸時代の時刻と時報―』では、現存する時太鼓・太鼓櫓の分布図・一覧表を載せているが、津軽地方については言及していない。

そこで、これらの先行研究を基に、弘前で時を刻んだ城内の時計・時太鼓と城下の時鐘の実態を明らかにし、青森町の時鐘・黒石町の時太鼓についても考察する。

『津軽史事典』^⑦に、平常は不定時法の九つ、八つを用い、「弘前藩庁日記」の天気付は十二支で表記し、四代藩主信政の時から当初は三の丸で時太鼓、森町で時鐘を打たせたが、時鐘が鳴った時をその時刻の始まりにしたとある。『御用格』（寛政本）下巻に「坊主方」^⑧、『同』第一次追録本下巻に「坊主方 御時計共」^⑨、『同』第二次追録本に「坊主方 附御時計共」^⑩、『津軽史』第五巻に「時太鼓」・「時鐘」の項目があり、これらを検証しながら考察を進める。

主に使用する史料「弘前藩庁日記」^⑫は、国元と江戸での記録であり、以下、「国日記」、「江戸日記」と略称する。

一 弘前城内の時計

弘前城本丸の詰座敷と御用所の間にあった「御時計ノ間」⁽¹³⁾に時計が置かれていて、隣接して「御坊主頭部屋」があった。時計は坊主頭の下で「時計師表坊主」が扱った。「国日記」寛文五年（一六六五）八月七日条に三上藤右衛門が下着し、「御とけい下ル」とあり、「御時計ノ間」に時計が置かれたのはこの時からとみられるが、運用については不明である。元禄五年（一六九二）、江戸から時計が届き、城内の時計を登らせていて、これは修理の為であろう。⁽¹⁵⁾時計は重宝の扱いで大小二箇あり、鉤・弦のある和時計であった。⁽¹⁶⁾

不定時法では昼夜で長さが違い、季節によっても違うため、一挺天秤時計では朝夕二回、天秤に架ける分銅の位置を変えなければならなかった。二挺天秤は自動的に朝夕が変わるように改良された。⁽¹⁷⁾

享保一二年（一七二七）、時計の修理を江戸で行わせようとしたところ、細工を知っている買物役五十嵐源之丞に繕わせることにした。⁽¹⁸⁾

延享四年（一七四七）、時計師菊池茂閑と子利三の下で、下地鍛冶細工桜田助七が登城して、四の廓の作事方の鍛冶屋に詰め、時計の狂いを直してきた。町年寄より利三病死後に時計師に助七を任ずる願いが出された。これは、四の廓から本丸までは直ちに伺えないことから、町職人の助七を剃髪させ、坊主に召し直しの願い出であり、家老が聞き届けている。この時、助七が桜田茂閑と名改めしているところから、師匠名を継いだものとみられる。⁽¹⁹⁾宝暦六年（一七五六）、時計師表坊主桜田半鉄

は江戸で時計稽古中に出奔したが、茂閑との関係は不明である。⁽²⁰⁾同九年、二代茂閑が後を継ぎ、安永四年（一七七五）、茂閑は細工した「尺時計」を冥加のためと差し上げたが、一刻を二尺で計る時計であった。⁽²¹⁾天明四年（一七八四）七月、茂閑が病で暇を取り、一〇月に倅古伯が並表坊主で新規召抱えになった。⁽²²⁾寛政三年（一七九一）、御用所坊主となり、同七年に還俗し、小細工見習いになっているところから、この時古伯から茂作に改名したとみられる。⁽²³⁾

この間の宝暦一二年、菊池清鉄が親茂閑から時計の修理を学んだが、覚束ないところから三、四年間江戸で師範についての稽古・伝授を願ひ出て認められた。⁽²⁴⁾

時計師表坊主は時計の扱いを親からだけでなく、熟練を要するため江戸で師範について学んでいた。

四代藩主信政の時刻に関する行動を史料から見る。

「史料1」「奥富士物語」（上）⁽²⁵⁾（傍線筆者、以下同じ）

毎月十五日、廿八日御家中の御礼被為請候に付、願の内より御上下御装束御召替被遊、御礼は四ツ時初る御定故、四ツ時前御礼の面々不残相揃、御目付方より其段申上候事、其節刻限御聞せ被遊御時斗四ツへ何分懸り候と申時御出被遊遊候。御定稀に其内四ツ打申て其段申上候得共、御薬等御召上候節杯は、少残り候而も其儘御茶碗下に被為置、御表へ御出遊候。（中略）其外御社参或は御廟参にも御供揃何時と刻限に少も無相違御出被遊候。

藩士の月並礼が四つと定められているが、信政は目付より揃っていると告げられ、近習を通して時計の時刻を確かめている。稀に四つと伝える

と、投薬の途中であっても薬の入った茶碗を置いて、表に出る刻限を守っていた。「四ツ打」とあるのは、時太鼓によって時刻を確かめたことになる。

次に八代藩主信明の「在国日記」⁽²⁶⁾寛政元年（一七八九）一月一〇日条に「三社江参詣（中略）夫より帰城、八時打一寸廻り、諸事、如例年済」とあり、半時（一時間）刻みの日程になっていて、「八時打」は時太鼓を指し、時計師表坊主が江戸城のように、御用部屋を廻って時刻を告げていたかはわからないが、藩主として時計も利用できる立場にあり、時計・時太鼓により時刻を意識した生活を送っていたことが窺える。

弘前熊野宮（現熊野奥照神社 弘前市）神主長利薩摩は、最勝院を通して藩庁から次のような呼出状を受け取った。

「史料2」弘前奥照神社「御用留」⁽²⁷⁾天保五年七月二四日条

御用之儀有之候間、今日四時已前登城被仰付候、此旨申入候、以上、

七月廿四日

最勝院

長利薩摩殿

藩庁からの呼出状に請状を提出し、指定の四時に合わせて立烏帽子・袍・木沓で支度し、侍勝吉・家来新五郎を供にして登城している。この日の「国日記」には長利薩摩が、護穀神住吉宮での風雨順時・日和揚げの祈禱により銀子三枚の目録が渡されていて、時刻を守って登城していることが解る。⁽²⁸⁾

藩士は四つの出仕に遅れる者があり、目付より寛政一二年・享和二年（一八〇二）・文化五年（一八〇八）・弘化三年（一八四六）・安政六年（一

八五九）に、定めの刻限より早めに出仕するよう布令が出ていて、時刻厳守の意識の希薄さがみられる。⁽²⁹⁾

しかし、元禄二年（一六八九）の盆踊り期間中の木戸の扱い、延享四年の善光寺如来の開帳時刻、⁽³¹⁾文政一〇年（一八二七）の木造村銀蔵の肆時刻、⁽³²⁾文久二年の医学館種痘所での小児への種痘時刻が明示されているところから、時刻が生活の中に入ってきていることが解る。⁽³³⁾

「国日記」の時刻をどのように記述しているかをみるために、天明六年の日食の史料を挙げる。

「史料3」「国日記」天明六年一月一日条の天気付

正月一丙午日、曇、朝之内西風、快晴、巳之刻過合曇る、終日雪、昨夜戌刻過地震、今日午ノ刻日食、皆既と有之候共、爰元二而八八分位かけ相見得る、但曇候ニ付睨と不得相見、午ノ下刻頃臘月、夜ノ如く二成候、暫時明る成候、

日記方が暦を側に置き、日食の時刻を意識しながら観察し、日食は皆既でなく八分であったと記録している。この日の藩士の出仕は五つ前で、祝儀を述べた後に、直ちに退出している。

弘前藩江戸藩邸では、この日の「江戸日記」によると、日食皆既により家老・用人は六時、藩士は卯の刻の出仕であった。

嘉永二年（一八四九）二月一日、弘前藩の国許では日食により、御用所廻りは明六つ前の出仕で、祝儀を述べた後は直ちに退出となった、また、表方の月並出仕は用捨となっている。⁽³⁴⁾鳥取藩では天明四年から文政一二年までに八回、日食を理由に式日御礼・行事が延期になっていた。⁽³⁵⁾

「国日記」の天気付は、数字表記では昼夜の区別ができないことから、

十二支表記と併用して記録していることが解る。

二 弘前城の時太鼓

天和二年（一六八二）五月一日の四代藩主信政の国入りの御先荷物に、「御太鼓」二つ入っているとところから、これが時太鼓であり、胴が一尺であったとみられる。⁽³⁶⁾ 五月二日、城内二の丸辰巳櫓に太鼓を吊るし、城付足輕六人に香盤時計の見習いのため、時鐘堂から二人を派遣させた。⁽³⁷⁾ これは寛文五年（一六六五）、既に時鐘撞が運用されていて、ここでの香盤時計の使用方法を学ばせたものとみられる。享保二〇年（一七三五）、香盤時計の擦り減った押形、盛形一組、押駒一組を新規に詔えている。⁽³⁸⁾ 太鼓の皮が再三にわたり破れ、寛保三年（一七五〇）、張替を穢多孫作に命じている。⁽³⁹⁾

貞享三年（一六八六）、二の丸に鉛瓦葺きの太鼓櫓ができ、ここで打ち始めている。⁽⁴⁰⁾ 延宝五年（一六七七）の「弘前惣御絵図」⁽⁴¹⁾ では太鼓櫓が辰巳櫓の西に見えるが、番所は描かれていない。慶応三年（一八六七）の「御廓中御廓外之図」⁽⁴²⁾ には、二の丸御馬場の南東にみえる。

時太鼓は明六つに、最初五〇打、その後には時の数を打ち、他の時刻にはならし三打後に時の数を打っている。⁽⁴³⁾ 一日の始まりの明け六つを告げるために、特別に連打したものと考える。太鼓櫓の番人は、時鐘堂の出火の鐘を聴いて、城内の場合は早太鼓、茂森町・本町・寺町・蔵主町・亀甲町・紺屋町・馬屋町の時は五打、鎮火に銅鑼五打を打つことになっていた。⁽⁴⁴⁾

元禄九年（一六九六）八月六日、藩主信政は広須新田に巡回に赴く際の布令に、藩士・寺社・町方の火の用心と夜廻りを命じている。⁽⁴⁵⁾ 城内本丸・西の廓は時刻・半時に拍子木（手木）を打ち、六つには六打、半時に一打を打たせた。⁽⁴⁶⁾ 時刻は時太鼓、半時は時計に合わせて打つようになっていた。⁽⁴⁷⁾ 宝永三年（一七〇六）、拍子木の音が不同のため、寸法を決めて桜木で作成させている。⁽⁴⁸⁾ 享保一三年（一七二八）、町方の夜廻りが拍子木を勝手に打っていて、時刻を打つように改めさせている。⁽⁴⁹⁾ 本丸の拍子木に合わせて三の丸の足輕二人が拍子木を打ち、四の廓も倣った。⁽⁵⁰⁾ 夜廻りは時計師表坊主から半時を確認していたものとみられる。また、拍子木は時刻報知の役割を果たしていたことになる。

元禄一一年、城付足輕の二人が太鼓の打ち違いにより、五七、八日間を押込めの処分を受けた。⁽⁵¹⁾ 明和八年（一七七二）、朝六時の時太鼓の打ち数の不足と長短が問題となった。約一二〇〜一三〇打か一四〇〜一五〇打ところ、打ち数が足りないこと、打つ間合いが違っているため、巧者から指南を受けさせるようにした。また、元禄年間から時間の経過と足輕の交代により打つ方が曖昧になっていた上に、足輕七人の加役が事態を悪くさせたとみて加役を解かせた。⁽⁵²⁾

江戸の時鐘は「捨て鐘」が三打で、一打目は長く、二打・三打は続けて打ち、次に間を開けて時刻の数を打ち、一打毎に早くしていった。⁽⁵³⁾ 時鐘と時太鼓の違いがあるが、弘前でもこれと同じように打つたものとみられる。オランダ商館長メイランは、時報としての寺の鐘は予告の一打後、約一分を空けて二・三打、それから時刻数を打ち、最後の二打で終わりを告げ、間隔は一〇〜一二秒と聞いている。⁽⁵⁴⁾

寛政元年（一七八九）、城附警固小野伝左衛門、同並足輕小山内幸助・川口伴右衛門・花田半之助・鳥井崎辰之助は、時太鼓の時刻に気付かず、太鼓の打ち違いにより押込めの処分を受け、六日後に許されている。⁽⁸⁵⁾

時太鼓は城内に時刻と出火を報知させるため置かれ、打ち違いの足輕は処分されていて、藩庁の厳しい管理下にあった。

三 弘前城下の時鐘

(一) 時鐘

寛文五年（一六六五）、四代信政が初めて時鐘を撞かせたのは、真教寺（弘前市）の時鐘で、森町に時鐘堂ができるまで時刻を知らせた。同二年、薬王院（同市）の時鐘と取り替えがあった。⁽⁸⁷⁾

貞享二年（一六八五）、大円寺（現最勝院 弘前市銅屋町）境内で時鐘の鑄造が行われた。⁽⁸⁸⁾町奉行が時鐘を撞き始めたところ、響音が悪く、鑄造に当たった渡辺近江・時計屋次兵衛に見分させ、再度鑄造させた。⁽⁸⁹⁾上野寛永寺の梵鐘は壱越調であることから、ここでも音色が良くないことを問題視したことになる。

延宝五年（一六七七）の「弘前惣御絵図」⁽⁹¹⁾に、横鍛冶町（後に本町、現森町）から西に入った土取場に、「時鐘」があり、その西の茂森町に面して「鐘つき嘉左衛門」屋敷が見える。寛政一二年（一八〇〇）頃の「弘前分見惣絵図」⁽⁹²⁾には「鐘撞堂」とあるが、「時鐘堂」とも呼ばれた。⁽⁹³⁾時鐘撞櫓は二階建て、一階に時鐘が釣っており、梯子で上がった二階が火の見る場所であった。時鐘堂は櫓・常香場（四坪）・庇（三坪）・番所

（八坪）・井戸で構成されていた。⁽⁹⁴⁾元禄一〇年（一六九七）、時鐘堂が破損し、立て直しに銀五二五匁一分の出費となった。⁽⁹⁵⁾

元禄二年（一六八九）、野里村の時鐘撞人久右衛門を、惣藩士・惣町中が負担して江戸で鐘撞きを見習わせようとしたが、病死により実現しなかった。⁽⁹⁶⁾同五年、時鐘茂合銭（時鐘養内銭とも呼称）から六人を一人に付銭一〇〇目・二人扶持で雇い、町名主宛の証文の案文には、津輕出生で寺請証文所持の者が、請人・受人と連名で提出することになっていて、この時、火の見る番人吉右衛門・三十郎が時鐘茂合銭から除かれる扱いに変わった。⁽⁹⁷⁾同六年、茂兵衛・七兵衛を残し四人が解雇され、壮年の切支丹類族四人を雇ったが、これは身元が確かな者を採用したものとみられる。

同一〇年、時鐘撞人六人の内、諸町役を免じられていたのは、土手町に家屋敷所持の四人と時鐘堂に妻子と住む一人であった。残る嘉左衛門は茂森町に半軒屋敷（表口三間五尺・裏行二〇間）で、人足三三人半を負担し、夜中も時鐘堂詰で町役を勤め兼ねるところから、町役免除が認められている。⁽⁹⁸⁾天保六年（一八三五）、鐘撞人長兵衛が暇願いを出し、倅富吉（二六歳）が給金一両二歩・二人扶持で雇われたが、世襲でなく新規の雇であった。⁽⁹⁹⁾

元禄一〇年、香盤時計で使用する飾屋作成の錫製の串が出来てきた。⁽¹⁰⁰⁾同一四年三月二七日、朝七つの時鐘が遅くなったことで、鐘撞人六人に對して調べが行われた。香盤時計は「定一時三寸二分立」で時刻を計っていた。香盤に押木で溝をつけ、抹香を盛って火を灯し、三寸二分毎に串を指して一刻を知り得た。抹香は寒暖の温度、晴・雨天による湿度差

で、灯し時間に変化がみられるため、時鐘撞きに狂いを生ずるとの説明により処分に至らなかった。⁽⁷²⁾これは、城内の時計と時鐘の差が問題になったことによるとみられる。文化一〇年（一八一三）、時鐘撞人善右衛門が時刻を間違ひ、戸締め一〇日間の処分を受けている。⁽⁷³⁾

寛政三年（一七九一）、町年寄が時鐘の出汗について藩庁から尋ねられ、七月一三日の昼八時頃の出汗は甚だしく、八月二〇日の朝六時半より五時半頃までの出汗は七月一三日ほどでなく、出汗についてはこれまでは報告してこなかったと答えている。⁽⁷⁴⁾このことから、藩庁は内密の取り扱いとして寺社奉行を通し、最勝院に領内安寧の祈祷を行わせた。これまで、古懸の国上寺の不動尊の出汗に、領内に異変が起こる前兆とみて、藩庁は寺社奉行立会の下で、神子連れられた弘前八幡宮神主が神楽を奏し、託宣を受けて領内の安寧を祈ってきた。⁽⁷⁵⁾

藩庁は国上寺の出汗に倣って最勝院に祈祷を命じものとみられる。

火の見櫓は当初三の丸にあり、御手廻組・御馬廻組・御留守居組が月番制で、昼二人・夜四人で勤め、雪降りの時期は引き上げていた。⁽⁷⁶⁾森町に時鐘堂ができると、この二階に火の見番の足軽二人が交代で詰め、出火に時鐘撞人に早鐘を撞かせた。

撞木は時鐘撞の外、出火に早鐘を打つことから消耗が激しく、貞享三年・元禄五年、同七年、誓願寺の林から柳の木を伐りだし、同一〇年、町人足五人・町馬一匹で約四丈の柳一本を切り出している。⁽⁷⁷⁾その後、外瀬袋村から元禄一六年に一四本、享保二〇年（一七三五）に一〇本を用立てている。⁽⁷⁸⁾

時鐘撞人は町年寄が御国生まれで壮年の者を選び、身元を確認し、藩

庁に申し出て認められた。

（二）時鐘茂合銭（時鐘養内銭）

元禄三年、弘前藩庁は時鐘料を藩士・寺社、町方から徴収する方針を決め、⁽⁷⁹⁾同五年、七月中に支配頭が取り集め、八月初めに御金蔵に納めることになった。家老、城代津軽玄番、用人、近習津軽織部・津軽外記・津軽大蔵・渡辺清右衛門・新藤庄兵衛・傍嶋太兵衛・棟方十左衛門は、金蔵へ直納し、他の藩士は組頭が取り集める扱いであった。藩庁は時鐘茂合銭を藩士・寺社には知行高、町方には役家に応じて割り付け、時鐘撞人六人の給銭・諸経費を支払った。⁽⁸⁰⁾同六年、町方一九七軒に割り当てられた時鐘茂合銭は、銭高四〇貫二六五文で金高に直して六七一両五文であった。⁽⁸¹⁾徴収銭は当初、養内・時鐘撞養内銭・時鐘養内銭といったが、宝永三年（一七〇六）、勘定奉行は時鐘茂合銭として割り付けるようになった。⁽⁸²⁾

弘前八幡宮神主小野若狭家の「社務日記」⁽⁸³⁾には、正徳五年（一七一五）から嘉永六年（一八五三）まで時鐘茂合銭に関する記事がみえる。

「史料4」弘前八幡宮古文書「御用留帳」八 享保五年一月一日五条
一、時鐘茂合銭二而百石二付百八文宛、人別出銭帳御金蔵へ出置候
由二御座候二而、直二御金蔵へ為持可被遣候、上納手形此方へ
御覽せ可被成候、尤早々上納之様御支配所へも御通達可被成
候、以下、

十一月十五日

（寺社奉行）
須藤善右衛門

最勝院看守中

(下略)

知行高三〇〇石の最勝院は二七六文、三〇石の小野若狭は三二文を納入している。御金蔵への納入は一月に変わった。

享保七年の時鐘堂の諸経費について次の史料をみる。

〔史料5〕「国日記」享保七年九月二七日条

一、勘定奉行申出候者

一、銭貳百目

時鐘撞式人給銭、壹人二付百目宛

一、米三拾五石四斗

右同六人内式人八一人二付式人扶持宛、

四人八一人二付四人扶持宛、但十二ヶ月分

代銭壹貫四百六拾目貳分五厘

但四斗入壹俵二付、拾六匁五分値段

一、銭百八拾貳匁六分四厘 油・抹香・諸色代

三口合壹貫八百四拾貳匁八分九厘

文ニメ百拾貫五百七拾三文

内

六拾五貫五百五拾七文

御家中分出高

高百石二付

七拾文宛

俵子百俵二付

四拾壹文宛

金拾両二付

貳拾壹文宛

四拾五貫四百五拾六文

当町中分出高

上役

七拾文宛

但壹軒

中ノ上役

四拾九文宛、中役 三拾五文宛

但壹軒

下役 貳拾四文宛

下々役 拾四文宛

勘定奉行から家老に時鐘堂の諸経費を示し、時鐘茂合銭の割り付けは例年通りでよいか伺いを立て認められている。藩士が約六割、町方が約四割の負担で経営に当たっていた。

『奥富士物語』⁽⁸⁵⁾は、元禄五年七月、時鐘茂合銭の布令が出た時、町人の一人が時鐘は無用のため出銭を断った話を載せてある。この町人は町役の説得に応ぜず、町役から町年寄松山善之丞に訴えた。五つ時に惣町家主と町年寄宅に共に集まることにしたが、町人は時を間違え翌朝五つ時半に出頭してきた。町年寄は立腹して上を軽んずる不屈き者として声高に叱りつけると、腹痛で服薬のため遅くなったと言いつついる。この後、町人は悔い改め、町役の取り扱いに従ったという。ここに、時鐘銭徴収に納得しなかった町人の様子がみとれる。

時鐘茂合銭は藩士・寺社・町方が藩庁の御金蔵に納め、そこから時鐘堂の諸経費・鐘撞人の給銭に充てていた。

四 青森町・蓮華寺の時鐘

青森湊は寛永年間に開かれ、弘前藩は湊町として重要視して御飯屋を置き、町奉行・町年寄のもとで町造りが行われ、寺町（現青森市本町）に正覚寺・蓮心寺・常光寺・蓮華寺が創建された。⁽⁸⁶⁾蓮華寺には元禄十四年（一七〇一）に鑄造された梵鐘（高四尺・径二尺五寸）があり、「青森絵図」に蓮華寺の鐘楼と梵鐘が描かれている。湊町としての発展に伴

い、時刻を報知するものがないことが不便で、宝暦七年（一七五七）、蓮華寺から領内日蓮宗の惣録本行寺を通して、藩庁に時鐘の願いを出して認められた。この鐘を「七分鐘」と呼んでいるところから、三分を藩庁、七分を町方が負担して運営に当たったものと考えるが、詳細は不明である。鐘楼は三階建、北に窓を開いているところから、湊に向けたものであることが解る。上層に鐘を吊るし、昼夜の時刻を知らせた。鐘楼の南下に時守の屋敷（二間半に四間）があった。天明三年十一月二日、安方町からの出火が大火となり、蓮華寺も類焼し、鐘は乱打されて損傷した。文化一四年（一八一七）、梵鐘が鑄造され、再度、時鐘になったものとみられる。

船問屋を営む「伊東家日記」⁽⁸⁸⁾には、嘉永六年（一八五三）町奉行より四つの呼び出しを受けていることが記されてある。蓮華寺の時鐘で時刻を知りえたものとみられる。

蓮華寺は弘前藩主より下賜されたと伝える「紅葉時計」を所蔵する。

この和時計は元禄年間に製作され、梵鐘が時鐘になった宝暦七年に下賜されたと考える。この時計と時鐘の運用については不明である。

五 黒石町の時太鼓

明暦二年（一六五六）、黒石津輕家初代信英が、弘前藩四代藩主信政が幼少のため、幕府から後見役を命じられて旗本に列し、分知五千石を受けて黒石に陣屋を構え、黒石町（黒石市）を形成した。大手門脇に太鼓櫓があり、「黒石絵図」⁽⁹⁰⁾には元禄四年（一六九二）創立の法眼寺が見

えるので、これ以前に太鼓櫓があったことになる。盛岡藩士漆戸茂樹の「隣国便覧秘集」⁽⁹¹⁾には、時々太鼓を打ったとある。この太鼓は火事にも打った。⁽⁹²⁾

商家に残った「永代日記」⁽⁹³⁾「西谷日記」⁽⁹⁴⁾には時刻の記載がみられ、時太鼓により時刻を知り得ていたと考える。

この太鼓（経二尺三寸五分）は黒石藩主承叙が円覚寺（同市）に下賜したものが現存し、廃藩置県の際に移されたとみられる。⁽⁹⁵⁾

時太鼓は信英が弘前に倣って取り入れたものと考ええる。

おわりに

弘前城の時計は時計師表坊主が、江戸の師範について取り扱いを習得し、熟練を要した。

城内二の丸の太鼓櫓で、城付足輕が香盤時計を見ながら時太鼓を打ち、打ち間違ひには押込めの処分が下された。

城下の時鐘堂の時鐘撞人は、町年寄が御国生まれで身元が確実な上、壮年の者を藩庁の承認を得て雇った。時刻を間違つて打った時は戸締め処分となった。時鐘茂合銭は藩士・寺社に約六割、町方に四割を負担させて藩庁御金蔵に納め、そこから勘定奉行が諸経費を出費した。時鐘堂は町年寄の差配下にあったが、藩庁が管理し、厳しく運営されていることが明らかになった。

四代藩主信政が城下の時鐘に続いて城内の時太鼓を始めさせたが、江戸の時刻制度に倣って導入したものと考ええる。それまで、明け六つ・暮

六つと月末の掛け取りや質流れのため、月の大小を意識して生活を送っていた人々が、時刻を意識し、商家の開店・閉店、職人大工・左官の働く時刻まで影響を及ぼしたとみられる。しかし、藩士の登城の遅刻に見られるように、昭和三〇年（一九五五）頃までには「津軽時間」と称して、約束を守らない風潮があった。その後、労使の契約に労働時間が明記されるようになり、時刻の社会化が進んだといえよう。

青森町・蓮華寺の時鐘も藩庁と同じ政策であり、支藩・黒石町の時太鼓も弘前藩に倣った施策であったと考える。

明治四年（一八七二）、廃藩置県で弘前城の時太鼓・城下の時鐘は役目を終えた。同十一年、第八師団が置かれ、午砲台（弘前市文京町）の「ドン」が正午を知らせ、大正十三年（一九二四）、弘前市役所（同市元寺町）鉄塔のサイレンに代わった。

現行の閏秒は一九七二年から二七回実施されたが、時間調整の失敗によるシステム障害の懸念から、国連の専門機関・国際電気通信連合（ITU）の会議で、二〇三五年までに廃止する決議案が採択された⁽⁹⁶⁾。

残された課題は、在方で時刻をどう知り得たかと、時鐘堂の出火の早鐘で出動する藩庁の火消役と弘前の町火消の解明である。

註

- (1) 『古代の漏刻と時刻制度―東アジアと日本―』（吉川弘文館 二〇二〇）三三三～三六、二二一・二二二頁。
- (2) 『時計の社会史』（中公新書 一九八四）七四～七六、一一七頁。
- (3) 国立国会図書館デジタルコレクション『暦法及時法』（恒星社 一九

三三）一三八～一四六頁。

- (4) 『日本の時刻制度 増補版第二版』（塙書房 一九九二）六一・六二、九九、一二六、一四九・一五〇頁。

(5) 『江戸の時刻と時の鐘』（岩田書院 二〇〇二）二九～六九頁。現在、本所横堀の時鐘に弘前藩江戸藩邸が割当金を納入していた記録が見い出せないでいる。

- (6) 一関市博物館（二〇〇九）二八～三一頁。

(7) 名著出版（一九七七）三四六・三四七頁。小館衷三『津軽藩政時代における生活と宗教』（津軽書房 一九七三）一〇頁。

- (8) 弘前市教育委員会（一九九二）四四二～四四九頁。

(9) 弘前市教育委員会（一九九三）二二一～二三四頁。

- (10) 弘前市教育委員会（二〇〇二）八一八・八二〇頁。

(11) 青森県文化財保護協会（一九七五）四九五～五二六頁。

(12) 弘前市立弘前図書館津軽家文書Ⅱ二五―一、二。現在「国日記」の元禄一三年から元治元年は、「弘前市立弘前図書館」（以下弘前図書館と略記）のホームページに入り↓「おくゆかしき津軽の古典籍」↓「弘前藩庁日記」↓「国日記」と進むとデジタル化されたものを見ることができ。

- (13) 弘前図書館津軽古図書保存会文庫「弘前城本丸殿中図」丙一七―一一九五。

(14) 「国日記」寛文五年八月七日条。

- (15) 「国日記」元禄五年八月八日条。

(16) 「国日記」享保二二年七月四日、同一四年九月一日、同一七年五月一日、元文二年八月二八日条。小館衷三氏によれば、大時計は弘前九戸時計店にあり、戦時中に東京の某コレクションに移されたという（『津軽藩政時代における生活と宗教』（津軽書房 一九七三）一一頁）。現在、

大名時計博物館（東京都）・セイコーミュージアム銀座（同）・国立科学博物館（同）に確認したところ所蔵していない。

(17) 前掲注(4) 一二三～一二五頁。

(18) 「国日記」享保一二年七月四日条。

(19) 「国日記」延享四年九月二七日条。弘前図書館「由緒書」第三八TK二八八～二二。

(20) 「国日記」宝暦六年三月二一日条。

(21) 「国日記」安永四年三月五日条。弘前図書館「由緒書」第三八TK二八八～二二。塚田泰三郎『和時計』（東峰書院 一九六〇）一五四～一六六頁。国立国会図書館デジタルコレクション 佐々木勝浩・渡辺誠・布村克志「国立科学博物館の精密尺時計の由来について」Bulletin of National Science Museum Series E: Physical Sciences & Engineering（通号二一、一九八九）四七～五八頁。前掲注(4) 一三四～一三六頁。前掲注(5) 一八九・一九〇頁。

(22) 「国日記」天明四年一〇月一三日条。弘前図書館「由緒書」第三八TK二八八～二二。

(23) 「国日記」寛政三年一〇月一日条。弘前図書館「由緒書」第三八TK二八八～二二。「国日記」寛政三年一月三〇日条と前掲注(9) 二二二頁は、ほぼ同文で、桜田茂閑から倅古伯の江戸での時計細工稽古を願い出たが、一二年差し控えるようになったとある。ところが、「由緒書」によれば、親二代茂閑は天明一〇年六月一〇日に死亡していることから、「国日記」の記事に疑問が残ることを指摘しておく。

(24) 「国日記」宝暦一二年一月二九日条。

(25) 青森県叢書第八編『奥富士物語』（上）（青森県叢書刊行会 一九五四）一九二頁。

(26) 国文学研究資料館陸奥国弘前津軽家文書「在国日記」二二B―三二二

（三三八。浪川健治監修・根本みなみ総括編著『弘前藩主津軽信明日記集成』（東洋書院 二〇二二）三七七頁。

(27) 熊野奥照神社蔵。

(28) 「国日記」天保五年七月二四日条。

(29) 黒瀧十二郎『弘前藩政の諸問題』（北方新社 一九九七）二二七～二九頁。

(30) 「国日記」元禄二年七月一日条。

(31) 弘前図書館岩見文庫「善光寺如来就巡行御用留」GY一八〇―一。拙稿「弘前藩領における勅化について」（『弘前大学国史研究』第一五〇号、二〇二二）二七～三〇頁。

(32) 「国日記」文政一〇年一〇月二六日条。

(33) 「国日記」文久二年三月四日条。弘前図書館岩見文庫「御用留」GY二一五―二二五『新編弘前市史』資料編3（近世2）（弘前市 二〇〇〇）資料番号二二六「御用留」七二八頁。

(34) 「国日記」嘉永二年二月一日条。

(35) 「江戸時代の日食」（鳥取県第八〇回県史だより）二〇二二。

(36) 「国日記」天和二年五月一八日、寛保三年八月一五条。

(37) 「国日記」天和二年五月二一日条。荒井清明『弘前今昔』（北方新社 一九八五）二四～二七頁。

(38) 「国日記」享保一〇年閏三月二二日条。

(39) 「国日記」寛保三年八月二七日条。

(40) 「国日記」貞享三年一〇月一五日、安永五年三月五日条。

(41) 弘前図書館貴重一般郷土資料「弘前惣御絵図」KK二九〇・三ヒロ。

(42) 弘前図書館「御廓中御廓外之図 坤」TK三八七―二八三。

(43) 「国日記」元禄七年六月一・二二・二二日条。

(44) 「国日記」宝永五年一〇月一三日条。

- (45) 「国日記」元禄九年八月六日条。
- (46) 前掲註(25) 七〇・七一頁。
- (47) 「国日記」元禄九年八月一四日条。
- (48) 前掲註(25) 七一頁。
- (49) 「国日記」享保一三年一〇月二七日条。
- (50) 「国日記」天明元年四月二一・二二日条。
- (51) 「国日記」元禄一一年三月二八日、五月二五日条。
- (52) 「国日記」明和八年一〇月一三日条。
- (53) 前掲註(5) 一七五・一七六頁。
- (54) 新異国叢書第Ⅲ期1『メイラン 日本』(雄松堂出版 二〇〇二) 一四二頁。谷釜尋徳『歩く江戸の旅人たち』2(晃祥書房 二〇二〇) 四〇頁。
- (55) 「国日記」寛政元年一〇月二五・三〇日条。黒瀧十二郎『日本近世の法と民衆』(高科書店 一九九四) 二七〇頁。
- (56) 「国日記」寛文五年五月二五日条。前掲註(25) 七九頁。
- (57) 弘前図書館岩見文庫「津軽歴世録 坤」GK二一五一 寛文二二年閏六月二九日条。
- (58) 「国日記」貞享二年六月二七日、一〇月二日条。
- (59) 「国日記」貞享三年四月三〇日、五月二日条。
- (60) 前掲註(5) 三五頁。
- (61) 前掲註(41)。
- (62) 弘前図書館津軽家文書TK二九〇・三一一九。
- (63) 「国日記」元禄一〇年八月二八日条。
- (64) 「国日記」宝永二年一〇月一七日条。
- (65) 「国日記」元禄一〇年八月二八日条。小館衷三氏によれば、時鐘堂は昭和初期まで残っていた『津軽藩政に於ける生活と宗教』(津軽書房

- 一九七三) 一一頁。現在、弘前市教育委員会の立てた「時鐘堂跡」(弘前市森町)の木柱には、右側「じしょうどう」、左側はカッコして(かねつき堂)とふりがなを付してある。
- (66) 「国日記」元禄二年六月二〇日条。
- (67) 「国日記」元禄五年七月二日、八月二九日条。青森県立図書館「松井四郎兵衛留書」三三二・一、マツイ。
- (68) 「国日記」元禄六年六月二〇日条。
- (69) 「国日記」元禄一〇年九月二〇・二二日条。
- (70) 「国日記」天保六年二月二二日条。
- (71) 「国日記」元禄一〇年九月一八日条。
- (72) 「国日記」元禄一四年三月二七日条。
- (73) 「国日記」文化一〇年六月二八日条。
- (74) 「国日記」寛政三年九月五日条。
- (75) 小館衷三『津軽藩政に於ける生活と宗教』(津軽書房 一九七三) 八一頁。拙稿「弘前藩領における神職について」(『弘前大学國史研究』第一四二号 二〇一七) 四八頁。
- (76) 「国日記」天和二年一月七日、元禄二年一月一九日条。
- (77) 「国日記」貞享三年八月一九日、元禄五年九月五日、同一〇年四月八日条。
- (78) 「国日記」元禄一六年四月五日、享保二〇年閏三月四日条。
- (79) 「国日記」元禄三年一月二九日条。
- (80) 「国日記」元禄五年七月二一・二三日条。
- (81) 青森県立図書館「松井四郎兵衛留書」三三二・一、マツイ『新編弘前市史』資料編2(近世1)(弘前市 一九九六) 一〇八八頁。
- (82) 「国日記」元禄三年一月二九日、同五年七月二五日条。前掲註(81)。
- (83) 「国日記」宝永五年一月五日条。

- (84) 弘前大学附属図書館「弘前八幡宮古文書」。
- (85) 前掲註(25) 六六・六七頁。
- (86) 工藤大輔「青森開港の年代をめぐって―自治体の刊行物と歴史研究―」『弘前大学國史研究』第一五二号 二〇二二 二頁。
- (87) 弘前市立博物館。弘前大学・国文学研究資料館共同研究成果報告書『津軽デジタル風土記資料集』(二〇二〇) 一二六―一三〇頁で、成立を貞享元年から元禄初年とするが、蓮華寺の梵鐘は元禄一四年に鑄造されていることから、元禄一四年以前の作図とみたい。
- (88) 『青森市史』第一〇巻 杜寺篇(青森市 一九七二 四七七・四七八頁。
- (89) 伊東家文書「家内年表」〈『青森市史』第七巻 資料編(1)(青森市 一九六六) 一頁〉。
- (90) 弘前図書館津軽家文書TK二九〇・三一四〇。
- (91) 国立国会図書館 一二七―二八一。
- (92) 「諸向心得」〈『黒石市史』資料編Ⅱ(黒石市 一九八六) 三五四頁〉。
- (93) 高橋幸江氏蔵。
- (94) 青森県立図書館「西谷日記」西一九。
- (95) 『黒石市史』通史編Ⅰ(黒石市 一九八八) 口絵「時太鼓」。
- (96) 読売新聞オンライン(二〇二三年二月二二日)。

(しのむら・まさお 弘前大学國史研究会名誉会員)